2021・2号

# 直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

48号

2021・7-2021・12

◉特集1◉

## トキ鉄 直江津D51 レールパーク

◉特集2◉

高田・直江津合併 上越市発足50年

## 100年前に「上越発展策」を提言した人たち

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ

## 頸城平野に稲作が伝わったころ

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

## 直江津 今は昔の三題噺

歴史は「今日」への手紙

◉

## ヤラシャレ踊

# 直江津　今は昔の三題噺

堺　寛彦

「何か、書いてみませんか？」という、ありがたいお誘いに接し、ふと思い浮かんだのが、極私的な〝直江津今は昔〟の三題噺。

**第一話「蔵」**　生まれ育った直江津の実家（中央二丁目）は、建て替えてしまって、その面影はないが、子供の頃の間取り（見取り図参照）は家のど真ん中に〝蔵〟が鎮座ましまし町屋造りだった。近所にも中心部あるいは目立つ所に〝蔵〟が設えられた家が結構存在していたように記憶している。扉には立派な家紋が彫り込まれていて、それぞれの家で違っているのが不思議だったものだ。蔵にはあまり大したものは入っていないのに、何故か大きな味噌樽が二つも置かれていたのが妙に頭に残っている。蛇足ながら何かことある毎に「悪いことをすると、蔵に入れられるんだぞ！」と注意され、一度だけだが何かの罰で蔵に閉じ込められ、文字通り真っ暗闇の時空をたった一人で経験したこともあった。

話は戻って〝味噌〟。ある時、祖父に〝蔵〟の位置や、その中に置かれている〝味噌〟について尋ねたことがある。答えは「屋敷蔵（座敷蔵）」は風の強い直江津の街で、いざという時に備える設備であり、火災が起きれば様々なものを蔵に運び入れて扉を閉め、さらに密封するために、味噌は目地止めの役割があるのだという。それを聞き、妙に感心した覚えがある。時代は下って、果たして街の備えは往時以上に万全と言えるだろうか？

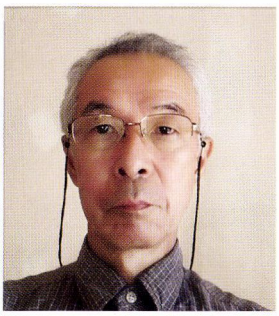
**第二話「駄菓子屋」**　子供の行動範囲の中でも、結構な数の〝駄菓子屋〟があった。例えば、我が町内では、TとK。隣の住吉町ならT。少し足を延ばして塩浜町にはI。緑町のA。天王町にもあったはずなのだが、画像は浮かぶものの名前が出て来ない。

その駄菓子屋のメインメニューといってもいいだろう〝くじ〟。店の一番目立つ所に、思わず欲しくなる豪華（？）賞品が飾られていて、それを目指してお金を払い、〝くじ〟を引く。一回五円のチャンスに、祖母から頂戴した一〇円で二回挑戦するのが大体のスケジュールなのだが、何度やっても「スカ」ばかり。〝くじ〟に、はまってしまった者を余所に、一個二円の黒飴を買って行く遊び仲間の姿に接し、ブレーキをかけてみるものの、どうしても賞品に目を奪われてしまい、誘惑に克てないという日常だった。

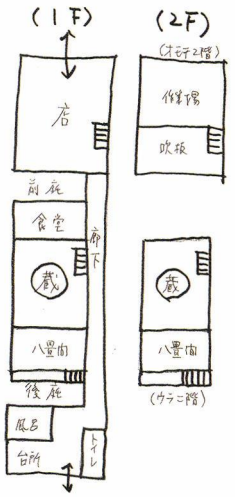
そんな〝くじ〟を巡ってのとっておきのエピソード。ある日、馴染みの店でいつものように挑戦しようとしたら、「どっかの悪ガキが〝くじ〟だけ、かっぱらってったみたいで、ひいてもらわんないんだわ」とのこと。普通なら「ふーん」で終わるところなのだが、何を隠そう、〝くじ〟泥棒の下手人が、ここにいるからだ。ほんの数日前、「これだけ挑戦してるのに、『スカ』ばっかり。ホントに『当たり』が入っているんだろうか？」と思い立ってしまい、つい、〝くじ〟の束に手が伸びてしまったというわけだ。顔中が熱くなり、他の〝くじ〟を引き、「スカ」の景品を手に早足で店をあとにしたのはいうまでもない。ちなみに、先だって手にいれた〝くじ〟の束は、家で一枚一枚、水に浸けて浮き出た文字を確認。結果は…残念ながら忘れてしまった。ばあちゃん、あらためてゴメンなさい。

**第三話　「銭湯」**　街の中には結構な数の銭湯があって、我が町にはＹ風呂屋。近くの町内にはＨ山湯、ＪＮ風呂。少し足を延ばしてＡ湯。〝角力さ〟の反対角に一軒。緑町にもあったような気がするし、駅前通りの銭湯も何となく映像が浮かんでくる。実家には内湯があったので、あまり銭湯には縁がなかったのだが、薪の風呂釜が壊れてしまい、ガス釜に交換するまでの数年間、銭湯通いをすることになって存在を身近に感じられるようになった次第。

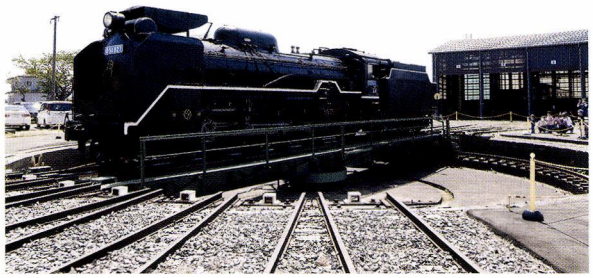
そんな〝銭湯〟を巡るエピソードもいくつかあるのだが、いまだ鮮明に覚えているひとコマを記しておきたい。その日は一人で出かけたように記憶している。いつものように湯船に浸かり、頭を洗っている時のこと、突然うしろから「○○！　そのまま、じっとしていなさい」の声。何のことだ？　と思う間もなく、ザブーンと頭にお湯。「もうひとつかけるから、よく手でゆすぎなさい！」と続く。ひと通りの動作を終えて振り向くと、そこには知らないわけではないのだが、かと言ってそう親しいとは言い難い近所のおじさんの顔。お互いに目を見合わせ、おじさん「あっ！　うちの○○だとばっかり思ってた。ごめんごめん」。これは銭湯がにぎやかだった時代だからこその珍事、そして身近なところに銭湯があったからこその出来事。今はもう望むべくもない、味わい深い光景ということになる。



堺　寛彦（さかい　ひろひこ）さん
行政書士、大学講師（非常勤）その他にも
アルバイトを幾つかこなす年金受給者。



# トキ鉄
# 直江津 D51
# レールパークを歩く



転車台に乗る D51（827）
昭和 18 年、当時の鉄道省浜松工場製造。廃車後個人所有となり、平成 29 年、重量物や鉄道車両を輸送するアチハ㈱が購入。圧搾空気動力に改造して、和歌山県有田川公園で体験乗車を行っていた。令和 3 年、トキ鉄が 5 年のリース契約で、直江津運転センターへ。
D51 が乗る直径 20 m もある転車台は、大正 2 年に竣工した機関庫当時のもの。トキ鉄の有志が再整備して稼働させた。





連結を見守る人たち




直江津・関山間に黒煙を上げて蒸気機関車が走ったのが明治 19 年、今から 136 年前のことである。そして明治 26 年、高崎まで開通すると、唯一の日本列島横断鉄道となった（上越線が開通するのが昭和 6 年のことである）。明治 37 年には、直江津・新潟間が開通。大正 2 年に北陸本線が全通すると文字通り鉄道のまち、鉄路の要のまちとなった。そして平成 27 年、北陸新幹線の開業に伴い並行在来線部分が越後トキめき鉄道として出発。

輸送だけではなく、楽しめる鉄道として 5 月 29 日「直江津 D51 レールパーク」がオープンした。

どんなものがあるのか訪ねてみた。

◆営業日
12 月上旬までの土・日・祝日の午前 9 時 45 分～午後 5 時。
◆入場料金
大人 1000 円・子ども 700 円。シーズンパスポートもある。

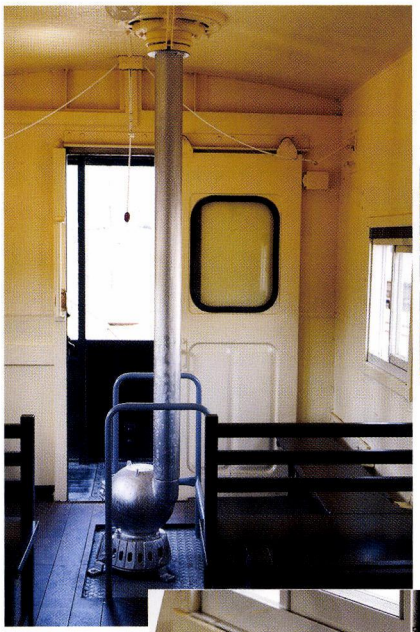


ワフ 29600 形　有蓋緩急車
貨物室とデッキが付いた車掌車。貨物列車の最後部に連結され、緊急時に車掌が手動でブレーキをかける。アチハの所有だが、もとは建築家の清家清が所有していたものという。



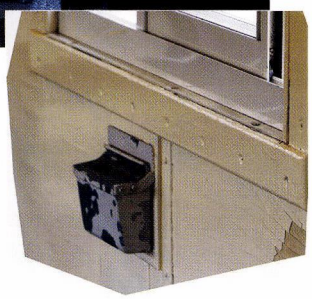


413 系電車
昭和 61 年代に登場した近郊型電車と言われるもの。JR 西日本から 4 両購入。購入に合わせて国鉄時代の急行車両の色に塗り替えた。
3 月まで JR 七尾線を走っていた一両を扇形車庫で展示、社内でトキ鉄グッズを販売している。
他の 3 両は JR 東日本仕様の ATS（自動列車停止装置）に取替え、観光列車としては知らせる予定だという。交直両用車両なのでトキ鉄全域を走ることができる。





ヨ 6000 形緩急車
一般に〈車掌車〉と呼ばれた車掌専用の車両で、ワフのような貨物室はない。
車内にはだるまストーブや灰皿も残っている。

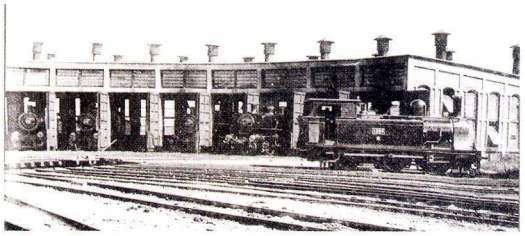


「鉄路の石」缶詰製造
最初は海洋高校に委託したが、手動製罐機を導入。斎藤運輸部長自ら実演してくれた。



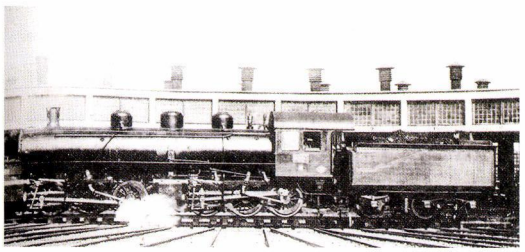


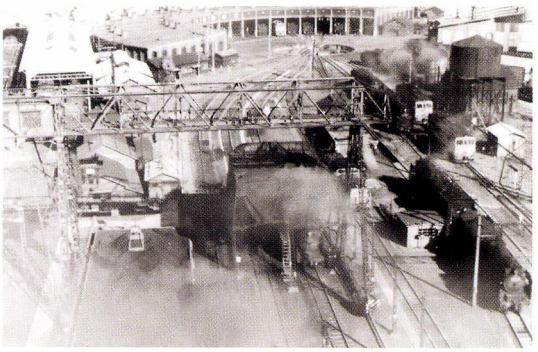




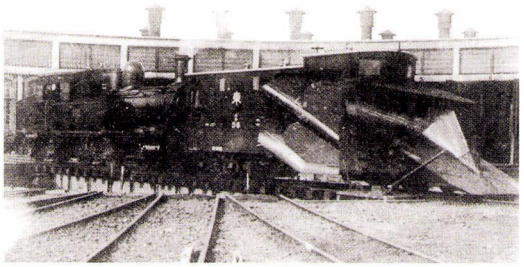


大型ディーゼル機関車
いざという時のD51をけん引する。扇形庫と呼ばれる機関車整備工場は戦中に建設された。建物の右側に最初の線路敷の痕跡がある。

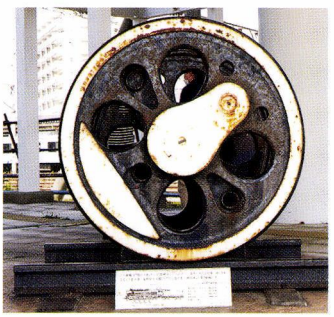




直江津・長野間が電化された昭和41年ころか。蒸気機関車と電気機関車が混在する珍しい景色。
右手、給水塔の向こうに扇形庫が見える。



機関庫は大正1年6月竣工。鉄筋コンクリートで外壁をレンガで装飾していた。当時の額で114,000円を要した。
180度以上開いた扇形で、22両の機関車を同時に収容できた。当時、直江津駅には34両の機関車が配されていた。反対運動もあったが、昭和48年に解体された。
大正4年の「新潟県写真発展号」には、転車台に乗る全長18.8mの9800形(9860)マレー式機関車と、1800形(1860)と呼ばれる機関車が見える。







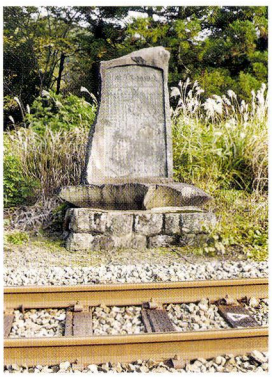
ホームへ向かう「雪月花」
車両の設計は建築家の川西康之。車内の料理のプロデュースは雑誌「自由人」の岩佐十郎。豪華な車両は数々の賞を受けいてる。

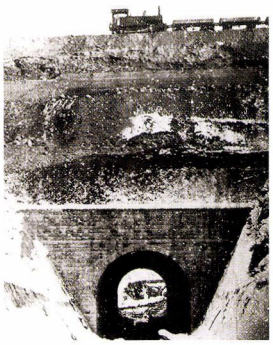


左上 洗車や社内整備を受けるトキ鉄のメイン車両。
左　 冬に備えるラッセル車

昭和21年12月9日、大田切築堤で発生した土砂災害脱線事故の「殉難碑」を直江津機関区と保線区有志が建碑。
文化財ではないが工事碑と線路を挟んで建てられている。





大田切川築堤と大田切工事碑
本誌46号で詳しく紹介したが、1年8ヶ月の突貫工事で水路トンネルを構築し、上に33mの土盛りをした。工事の死者79名中、63名がコレラによる死者だった。

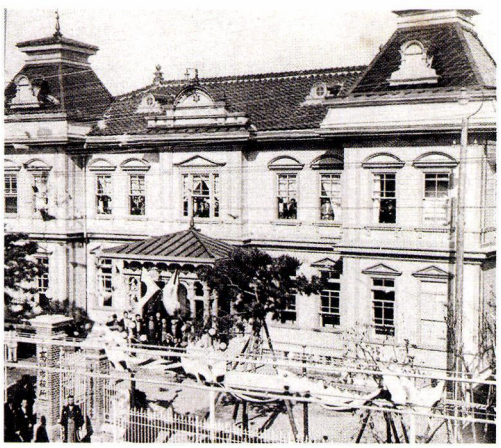
## 国　指　定
## 登録有形文化財



二本木駅の珍しい油庫
駅舎とともに指定されている。

# 高田・直江津合併　上越市発足五〇年

# 一〇〇年前に「上越発展策」を提言した人たち



高田市役所（竣工式当日）

＊

本特集は、一〇〇年前に「上越発展策」をどのように考えていたのか何人かの論述を紹介して、そこから五〇歳になる上越市の今を考えてみようというものである。

本稿の基にした「上越発展策」は、上越信用金庫内にあった上越産業振興研究所の依頼を受け、現代語訳したものである。目的が「どのようなことが書かれているのか」であったため、原文のニュアンスを損ないたくないものは「」でくくり、簡単な解説を付け加えた以外は大幅な現代語訳（北越出版・佐藤）をし、執筆者の中には意外な経歴を持った人物が多いので人物紹介を付して一冊（平成一八年刊）にしたものである。

＊

興味深いのは、「上越」と言いながら、ほとんどが「高田」を指している。それは執筆の依頼者が高田市長であり、また市史の付録という理由だけではないようだ。上旧「高田市史」に「上越発展策」という別冊付録（復刻版では合本）がある。「高田市史」は明治四四年、高田中学校（高田高校）田川校長と教員であった布施秀治に編纂を委嘱して、高田開府三百年祭の翌年、大正三年に刊行された。

著者布施秀治は現頸城区両毛出身で、高田中学校に謙信文庫の創設し、後に東京帝国大学史料編纂所・帝室編纂局で「明治天皇御紀」の編纂に携わった人で、「高田市史」は刊行当時から地方史の手本と言われ、後の「直江津町史」とともに地方史の名著と言っても過言ではない。

「上越発展策」は、本編の倉石源蔵市長の序に続く例言に「…また、名士の論述にかかる上越発展策を別冊付録とせり」として、宮尾舜治・中村弼・風間萬次郎・関野貞・清水宜輝・竹村良貞・尾田信忠・竹内金太郎・春山泰治・金澤來蔵の一〇名によって執筆者されている。

越地域・頸城三郡を見通した発展策の論述もあるが、「高田」が三郡の〈盟主〉という意識が強く感じられる。

その理由を時代背景から推理してみたい。

城下町という特権を離れた高田は、衰退する町の経済を軍隊の誘致によって挽回しようと大々的な運動の末、第十三師団の誘致に成功した。しかし、十三師団の（旧）満州への転出など軍隊の移動は、「高田新聞」が師団・学校・官衙によって景気を維持する高田の経済を批判（上越市史・近代）するように、市の経済は軍の動向に大きく左右されることになった。同紙は続けて「城下として諸種の保護を受けてきた」高田の自立を促している（「上越市史・近代」）。

右のような背景の中、大正三年に高田開府三百祭を開催し、予想を超える大成功を収めた。続く新市庁舎の落成、市史の発刊など、城下町時代の誇りを取り戻したかのような高揚感から当時の高田市民に〈盟主〉という意識を感じ取れる。

*





上 山善スキー店
下 全国スキー大競技会 大正２年２月11日

なお、再録に当たっては訂正加筆し、紹介しきれなかった執筆者のプロフィールを長くなるのを承知で追加し、高田藩が輩出した人物群も探ってみた。

## 宮尾舜治

明治元年（一八六八）、広島村（旧新井市―妙高市）に生まれる。

明治一七年上京し、下谷で紀文堂という煎餅屋を開業（内国勧業博覧会で評判となる）して学資を捻出、二九年、帝大法科大学（東大法学部）を卒業。大蔵省入省（煙草専売制創立に関わる）・台湾総督府（この間、二年の歳月をかけ世界各地を歴訪）・中国関東都督府民生長官・愛知県知事・北海道長官・帝都復興院副総裁（関東大震災）・勅撰貴族院議員を歴任。

執筆当時は明治四三年に台湾総督府を去り、大正六年関東都督府に赴くまでの閑職に就いていた時期と思われる。

### 高田の自然と人柄

越後は雪国であるが、なかでも高田は雪で名高いところである。これを世界に類例を求めるならば、亜細亜（アジア）では満蒙（旧満州＝中国東北部からモンゴル）、西比利亜（シベリア）、亜米利（亜米利加・アメリカ）、カナダ、アラスカ、欧州の瑞典（スウエーデン）、那威（諾威・ノルウエー）、北露西亜（北ロシア）、南米のパタゴニア地方であるが、高田のように雪の豊富なところは無い。これは山形県の尾花沢と並んで世界の優と言うべきである。

しかし、その割合に寒気は激しくなく比較的温和で、そのために土地は豊饒、植物に与える天の恩恵は、前記の諸外国をはるかに越えている。

この雪の高田におけるまちの構造や建築を見ると、貧富の差が激しく、風俗・習慣についても差があり、到底、欧米と比較することはできない。欧米では国は富み、人々は溌溂とし、建築は壮大で美しく設備も整っている。それに引きかえ高田は、はなはだ貧弱で、寒冷地にありながら暖房設備もあってないようなもので、衣服食料も寒気を防ぐには充分ではない。したがって冬季間は活動が停滞しがちである。

ただ高田の特徴的なものに雁木がある。雁木は世界的に見れば南清・海峡植民地などの熱帯地方の市街建築に見られるもので、一方は雪中の往来を守り、他方は甚だしい暑気を防ぐためのものである。

寒と暑を防ぐために、同一の手段を採ったのは偶然の結果であるが、じつは最近の科学が考えていることは、このようなことである。この自然の妙を考え直してみるのもいいのではないだろうか。

寒中の欧州の市街は上流社会の活動時期である。上流社会では、春を迎えて草が萌え百花咲き乱れる頃になると、郊外の別荘に滞在して野外の自然を楽しみ、各地に旅行する。そして冬になれば、都市に帰って来て社交界の活動が始まる。それは雁や鴨が冬を追って来、燕が冬を待って去るようだ。はたして我が高田の人士はどのようにしているのだろうか。

雪国の人々は冬季間、雪の中にある時期は運動を欠き、飲酒の機会が多くなる。我が高田ではどうだろうか。スウェーデン・ロシアは、かつて冬季間の飲酒が有名であったが、今日、スウェーデンではアルコールの飲量が著しく減少している。これは「ゲーテブルグ制」を施行したためであり、結果として、冬期間の市民の運動が盛んになり、国民の健康に顕著な効果をもたらしている。

スキーはロシア・スウェーデンのような雪国の遊びであるが、高田市もスキーを導入したと聞く。はたして成果はどのようだろうか。ただ注意しなければならないのは、冬期間の健康増進に役立つ運動であるにも関わらず、単に子どもの遊びとして見過ごし、市の中心的役割を果たす紳士諸氏が（スポーツとして）率先してやらなければ、まだまだというべきである。

雪国で寒冷地である高田で考慮しなければならないのは暖房方法である。世界の寒冷地では大概、暖房制である（セントラルヒーティング＝地域集中暖房）。ロシア・ドイツ・スウェーデン等でもっとも発達し、経済的かつ活動的で健康上も大変良い。

わが国では樺太の一部でロシアのペーチカを採用しているが、囲炉裏は「熱の放散自由散漫」で損失がはなはだしく、時には薪をくべるために眼病の原因となる。また炬燵は熱の損失を考えれば経済的ではあるが、活動的ではなく健康面から見ても有害である。高田市のような積雪地では経済的で、かつ健康的な暖房方法について充分研究する必要がある。

高田のような積雪地で活動が制約され、また自然の恵みもそれほどではない地方においては、「人々の率直の性」を養うのに大変良く、往々にして「真摯率直の英雄」を生むことがある。温暖の地に見られるような狡猾な性格と比較して興味ある問題である。

我が尊敬する霜台公（上杉謙信）が、この地方の代表的英雄であるということは、単なる偶然ではない。この点を我々は、誇りとして天下に主張してもいいであろう。

## 上越の歴史

高田市を富裕にする第一は、高田を取り囲む周辺地域を富まさなければならない。

高田の平野、即ち頸城地方は貧しいと言うわけではないが、その自然の資源を利用し得たかと言えば、私はそうは思わない。

歴史的に見て藩政時代は、頸城地方全体を統一する領主がいなかった。それは高田侯（高田藩）の領地と天領（幕府領）があるためであり、そのために地域の統一を欠き、したがって天然資源の活用、産業の勃興などがなかった。一言で言えば、統一的に富国策を講じる人物を見たことがない。

他の地方では領主が鋭意、領地を富まそうと努め、山に植林して水源を涵養し、水利を起こして開墾し、商工業を奨励するなど、あらゆる方法で富国策をとってきた。そのようななかにあって、高田平野は豊富な米に飽食して平和を貪り、（天領の）代官と領主とは互いにゆずりあい、富国のための大策を講じてこなかった。のみならず維新に至っても悠々「閑日月」を送って今日に至っている。

今、高田平野の人々は市中の志ある人達と呼応して、山には木を植え、野には動物を放して一家に一頭を養い、屋敷の無駄な風致林には桑や果樹を植えれば、「孟子の所論」を待つまでもなく、市中には近郷と呼応して多くの商業小工業が興り、購買力が増すことは間違いないであろう。

## 上越の現状

高田においてもっとも有利な点は労働力である。たしかに以前よりは減っているようだが、それでも他の地方に比べれば、まだ莫大な労働力の余剰がある。しかし、私から見れば、せっかくの労働力を無駄に放置しているようで驚きに堪えない。数百年眠らせてきた労働力は、初めは鋭敏さを欠き成績不良も免れないが、熟練してくれば、かえってそのほうが有利な点が多い。したがって高田地方の有力者（企業家）も、地元の労働力を用いても初めは困難するが、その後うまく行って、必ず仕事に有利になることをあらかじめ考慮しておくべきである。その証拠に、先進工業地帯へ頸城地方の労働力が供給されているではないか。確かに一、二回試してみて失敗者が仮に出ることがあっても、最初は分からないことでも忍耐と持久力が、それらを理解させる能力を持っている。

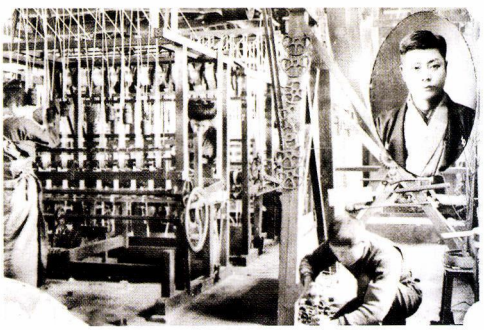
## 発展策

このような労働力の余っている高田市に工業を誘致することは、大いに歓迎すべきことではであるが、「インダストリーの如き大工業」は、しばらく無理である。大工業には、それを支える大掛かりな設備、つまり港湾の改修、鉄道の改良、金融機関の設置、機械修理のための鉄工所の建設など、あらゆる周辺設備が必要になってくる。このようなことは今の高田には望んでも無理なことである。

およそ、ものには順序があり、初めは「戸内的小工業」から始めるのがいいだろう。バテン、麻繋ぎ、帽子材料編み、その他、銅器、漆器、織物などなど試みることが沢山ある。

ただ、中央の市場との連絡を良くし、常に中央の情報を入れて時流を追い、需給のバランスを考えなければならない。時に流行を考えず顧客の動向も考慮しないで、漫然として旧態依然たる製品を製造し続け、ついには連なるようにして倒産するような愚を犯さないように望む。





上 小林バテン商会（中小町）
下 東洋ブレード工業

このように小工業から起こして行けば、労働者には賃金が支払われ、経営者にはいくばくかの利益も出るようになる。そして次第に交通機関が活発になり、金融機関が繁栄するようになれば、市の経済力も大きくなり、次には大工業も興せるようになる。

かくして、わが高田市は商品が豊富になり供給力が増し、北海に港が開かれれば、シベリアの開発と相まって、大陸との貿易が開始されるであろう。そして、欧州と東京とを結ぶ交通の最短路として世界に注目され、歓迎されることになるであろう。これが高田の将来のあるべき姿である。

わが高田の有力者諸氏には大いに奮起してもらいたいが、いたずらに望外な望みを起こさず、よく分を守り順序立って「隠忍持久」して、右のような最大目的に進んで欲しい。

### 人材の交流を計れ

終りに、高田市に望むことがある。中央との連携である。頸城地方から学術、政治、美術、工業、建築、土木、商業にと、優秀な人材を少なからず輩出しているが、しかし彼らは「鉄砲玉」のように郷里を飛び出したまま故郷と何らの交渉を持たない人が多い。私は寡聞にして、故郷出身の有識者が〈郷里の問題に関与〉したという話を聞いたことがない。これはどのような〈罪〉になるか私は知らないが、高田の有力者は、こちらから彼らとよく連絡を取り合って交流を深め、その知能や経験を導入し、資金の調達を計るべきである。このようなことは一時の呼びかけや表面上の交流で生まれるものではない。平生、常に交流を深めていく覚悟が必要である。これは郷土出身者だけではなく、北陸、大きくは日本全体の知能や実力者と常に接触を保つべきである。

頸城地方は、電気および石油事業などで僅かに中央と交渉はあるが、それ以外なにも交渉が無いのは嘆かわしいことであり、大いなる損失である。すでに、金子氏（金子伊太郎　新井の人・國友末蔵を招聘して上越電気、東北電力の前身を起こす）が起こした電気事業を山師事業などと罵るような愚かな時代ではないが、高田の有力者諸氏のいっそうの奮励を望むところである。

### 真摯率直の性質を失うな

最後に、なお注意しておきたいのは、前述した「真摯率直」の性質を失わないようにしなければならない。日本は今や「陶然として堕落の淵」に沈んでいる。そのなかで「真摯率直」の性質は、現在の日本の珍宝と言うべきである。この性質は霜台公以来、我等子孫の体の中に連綿として深く伝えられている。我等はこの「珍宝を尊重涵養」して、飢え堕落した天下、政界、実業界に知らしめなければならない。

そして、我等がこの重宝を持して、「一度は天下に号令する日」の来ることを望む次第である。

■ゲーテブルグ（エーテボリ）制　スウェーデンでは一九世紀に至ってアルコール飲料の消費が増え、暴力事件が多発した。そのためアルコール飲料を配給制にし、販売店は平日午後六時まで、週末を休みとして法制化した。

■海峡植民地　イギリス東インド会社のマレー半島における植民地の総称。シンガポール・マラッカ・ペナン。

■孟子の所論　盡心章句上二二　庭に桑を植え、家畜を飼い、田を耕せば…。

## 中村弼（たすく）

中村弼の高田における出自について手がかりがつかめなかったが、郷土史研究家村山和夫氏の「中村パン屋」というヒントから、臼井吉見の「安曇野」に登場する―あの二六新報にいた中村弼―ではないかと推測してみた。中村屋の主人相馬愛藏の「一商人として」に、大正三年（一九一四）日本に亡命して頭山満に匿われていたインド独立運動家ラース・ビハーリ・ボース（有名なチャンドラ・ボースと区別して「中村屋のボース」と呼ぶ＝中島岳志著「中村屋のボース」）を新宿中村屋のアトリエに移すきっかけを弼が作ったとあり、そのときの弼との会話が詳しく書かれている。また「頭山満直談集」にも同様のことが書かれ、犬養毅、頭山満、内田良平、大川周明などの日本のアジア主義がインド独立運動を支援し、ボースの日本亡命に関わっているのがわかる。

中村屋にかくまわれていたボースが、相馬夫妻にカレーをふるまったことが縁で純インドカリーを売り出し名物となった。愛藏は妻の国光とともに、荻原碌山・中村彝（つね）などの多くの若い芸術家に影響を与え、中村屋そのものが文化人や芸術家のサロンを形成していた。

―あの二六新報にいた中村弼―が主筆を務めた二六新報社は、財閥攻撃・娼妓自由廃業支援・労働者懇親会支援などのキャンペーンを張っていた。ボース移送当時、弼は犬養毅が始めた「日本移民協会」にいた（会長という説もある）。

弼の出自については、高田図書館に依頼して県立図書館に問い合わせたところ、日露開戦論を唱え、国論を開戦に導いたとされる「七博士」の一人中村進午の長兄であることが分かった。「新潟県人物百年史・頸城編」の「中村進午」によれば、中村家は高田藩の中級藩士であったが維新後、悪質業者に騙されて公債を失い没落したとある。著書に「太平洋大観」がある。

### 初めに

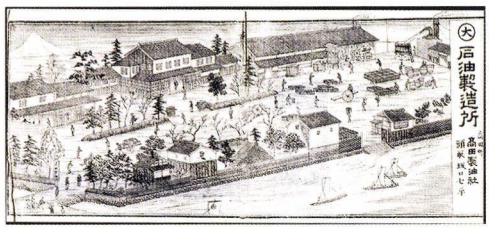
倉石教育委員長が、高田市および頸城三郡の発展に関する意見を私に求めてきたので、この際、極めて率直に、極めて露骨に、私の所見を披瀝させていただくことにする。

### 高田の現状認識

高田町が高田市になったのは、ある意味において発展と言えるかもしれないが、これは人口の増加、都市の膨張によって発生した自然の結果であり、祝福すべきものかどうか分からない。

封建都市として建設された高田が、その制度が廃絶すれば当然、昔の青田ヶ原に戻るべき運命であった。それを都市としての高田を維持しようと言うのであれば、新たに都市としての何らかの生命を与えなければならない。その生命とは産業を措いて他にはない。






上 明治の石油ブームの中心、玄藤寺油田（清里区）
明治 11 年の明治天皇北陸巡幸に随行した井上馨の助言で、麓まで 2kmの日本初のパイプラインを敷設した。
下 高田製油所 （鍋屋町）「北越商工便覧」より

師団の誘致、学校の建設は、封建都市として衰亡の危機にある高田に、幾分かの生気を与えたことには違いないが、単に、このようなことでは発展を望むべくもない。

かつて、羽二重などの機業を起こした人達がいたが、大きく発展したということは聞いていない。五分一（ごぶいち）の大根、家中の南瓜などあったが微々たるもので、産業として誇るような物ではないのは言うまでもないことである。会津の人、山川浩がかつて我が郷友に向かって「高田はつまらぬ所、ただ、牛蒡を喰らって屁を放るのみ」と罵倒した。もっとも、私は牛蒡が高田の名物かどうか聞いていないが…。

さらに頸城三郡について見ると、主として農業地帯であるが、沿岸では漁労も行われている。旧来からの名物として知られるものに、「高田由来記」「国華万葉記」等に拠ると、縮、狗脊、蕨、蝋、漆、雪海苔、塩鳥、塩引鱒、八目鰻、糸魚、鑷（毛抜き）、翁飴、臭生油（くそうず）（草水）などあるが、その産額は極めて少ない。

臭生油すなわち石油は、近年世界の需要がますます増加しており、もし玄藤寺（清里区・板倉区）周辺の石油坑に設備を整えて五百尺以上掘削すれば、産出量によっては多少地域を賑わすことができるのではないかと思うが、しかしながら、その実情を把握していないのが残念である。

「京の着倒れ、越後の喰い倒れ」という諺があるように、農産物・海産物の宝庫であり、越後人はこの自然の恵みに負けてしまってはいないだろうか。

全国的に人口増であるが、新潟県は一八〇万の人口で、年々約七千人の増加を見ている。この人口増に対して、何らかの経済的対策を講じなければ「喰い倒れ」もできない状況になる。

### 郷土の発展策は

我が日本帝国の現状を顧るごとに、郷土の現状は日本の縮図と思えるのである。生活の基盤を農業・漁業に拠り、軍隊・学校に拠ることもまたしかりである。

農業の利益は極めて薄く、それも年々薄利になっている。しかし人口増は、瘠土（せきど）（痩せた土地）の開発を余儀なくされることになり、農業そのものが利益を生まないものになってしまう。我が国には一五度以下の傾斜地が五万町歩もあり、開墾の余地があるのではないかと説くと、本所様（榊原政令）が開墾した田地が、気候不適のために早々に荒廃した事実を知っている者は、開墾は労多くして利が少ないことを知っているため、やりたがらない者が多い。

北米の人口密度は一平方マイルに二六人、我が国の三三六人に比べれば、一三分の一に過ぎない。それにもかかわらず、米国ではあり余る資源を開発するだけでは足りず、世界の隅々まで睨みまわして資源を開発しようとし、現に中央アジアに投資を試みつつある。そのなか

で、我が国は薄利のうえに薄利に甘んじ、骨までしゃぶるようなやり方は、何処から来ているのか、これで世界の生存競争に堪えていけるのだろうか。

「世の中は喰ってハコ（排便の俗語）して寝て起きてそれで始終は無茶苦茶となる」。これでは到底発展を望むべくもない。

我が国において最も豊富なのは人口である。頸城三郡においても同様である。いやしくも頸城三郡の発展を計ろうとするならば、この豊富な人口の活躍を待つほかはない。

私は頸城三郡の発展策を、日本の発展策として主張してきたが、意気盛んな者は、世界に出て各方面に進出すべきである。

幸いにして繁栄をみた者は、その利益を郷里に送付し、郷里の者はそれを資本にして経済を活発にし、未開の資源開発に使うこともできる。これは支那の海外移民（華僑）、伊太利（イタリア）の海外移民が教えているところである。しかし、英吉利（イギリス）にせよイタリアにせよ、逆に移民が多すぎて、押し止めるのに腐心している状態である。これは我が国が海外に進出するいい機会である。

高田および頸城三郡の発展を、高田および頸城三郡に求めるのは難しい。いやしくも、その発展を欲するのであれば、しばらくは、その策を世界に求めるべきである。

これは、私のかたく信ずるところである。

■羽二重　旧藩士大野正が八王子の機業屋で修行し、明治二二年高田で開業。就業時間や社員の福利厚生にも務めた。

■山川浩　会津藩家老　藩主松平容保に従って京都に赴く。会津藩の幕末・維新の辛酸を知る人。「鹿鳴館の貴婦人」といわれた大山巌婦人、大山捨松の兄。捨松は明治四年、津田塾大学の創立者津田梅子（九歳）等と共に一二歳でアメリカ留学した。

■縮　松之山郷の縮を松平光長時代に高田市下小町に縮市を建てて諸国（藩）へ売りさばいていた。ある時代に市税（いちぜい）が上がったために、当時、高田藩支配下にあった小千谷・十日町に市株を売り渡して廃絶した。

■狗脊（くせき）漢方薬　しだ植物の金毛狗脊の根茎を乾燥。肝腎不足の関節リュウマチ、膝関節痛・腰痛に用いる。

■雪海苔　岩海苔の別名　笠島、寺泊町野積、山北町府屋を名産とする。有間川・名立・能生産を西浜海苔というが、砂気があって良品とはならない。

越の海の野積の浦の海苔を得ば
分けてたもれ今ならずとも　良寛

■塩鳥（しおとり）キジ・ヤマドリ等の肉を塩漬けにしたもの。

塩鳥の歯にこたえけり冷やし酒
暁台（江戸時代の俳人）

■玄藤寺の石油　板倉・清里にまたがる明治の大油田。

■イタリア移民　一八六〇年から一九八五年間での一二五年間に二千九百万人の海外移民があった。

## 風間萬次郎

旧高田藩士の家に生まれる。高田中学（高田高校）卒業。裁判所判事、弁護士。大正十三年岡山県津山裁判所、昭和九年新潟県三条裁判所判事を最後に弁護士となる。

一

問題は高田市および頸城三郡の発展についてである

が、そのなかで高田市は頸城三郡の中心地であることは言を待たない。そして、その「盛衰消長」は両者が相互に関連しているため、論述に項目を分けず、また広範な問題であるので概観に止まることになる。

## 二

地方の発展は、結果として国家を発展させるもので、地方の発展と根本要素が同じであり、それを分けて論ずることはできない。政治・文学・宗教・教育・実業・風俗人情など全てが影響しあっている。

高田市および頸城三郡の振るわない原因に、右の要素の内の何点かあげられるが、大きな原因は、その風土のために風俗人情が一方に偏っていること、この土地が業を興すことを促進する素質に乏しいことにあると言っていいであろう。（教育に付いては別な見解を持っているがここでは述べない）

## 三

高田市および頸城三郡すなわち上越の人情風俗が、朴直で忍耐力はあるが、進取の気性あるいは敏捷性に欠けるという論評は多く言われているところであり、その原因が一年の内三分の一を雪に埋もれるための炬燵生活によるものだと、一部知識人は言う。たしかに原因の一つであろうが、自然の障害として容認しているばかりではなく、逆手にとって利用している例は古くから多くある。

近年、高田に雪艇隊（高田雪艇倶楽部＝高田スキー倶楽部）の組織もできたので、この雪艇（以下スキー）運動によって心身を鍛え、卑屈で臆病な風俗（性格）を矯正せよ、という意見が出るのはもっともであるが、私は、一歩進んで教育あるいは実用的に利用し、一般社会人に興味と実益を持たせるような方法を考えれば、多少なりとも、障害となっている「退嬰萎縮の風習」の一旦を改善できるのではないかと思う。すなわち、スキーの利用方法の改善は、上越における「人情風俗発展」の一策であると、私は思う。

## 四

水戸には正義を叫ぶ風土があり、薩長に天下国家を論ずる気概がある。このような地方の士気を鼓舞する気風は歴史的な背景があるとは言え、すべて先輩たちが子弟後輩を教養してきたものである。

上越地方には青年会があり、確かに身を警める道を教えてはいるが形式に流れている。

私は、気概ある人々が進んで、松下村塾のような熱意ある教育を青年会に注入する方法を講ずれば、上越の風俗発展の一策になろうと思う。これはいたずらな空論ではない。上越の士気の不振は当たり前のように言われてきたが、近年ようやく覚醒の機運が高まってきている。この機会を逃さないようにしなければならない。

## 五

雪の利用が単に上越の人々の心身鍛錬に寄与するだけではなく、高田スキー倶楽部は新たなスキーの歴史を作っており（スキー競技会）、中央の高官の来越や外国人観客も足を運んでいる。期間が限定的であり興行目的ではないが、それでも経済効果は少なからずある。今、大いに宣伝して、趣味・娯楽として来てもらって、鍛錬にもなるようなことになり、諏訪湖のスケートのような方策を講じれば、この地方におよぼす経済効果は少なくないであろう。

このような見地に立てば、スキーの発達が上越、ことに高田の経済的発展の一策と確信している。

## 六

私の論述を概括的で具体性が無い、士気の鼓吹、スキー

の改善と言っても、なにをどうすればいいのか説明がないと言う人がいる。確かに、そうである。

しかしながら、私のような立場の人間は、絵空ごとではないと信じ、出来るであろうと想像される事について述べているのであって、その手段・方法は専門家に譲り、一種の〈思い付き〉が必ずしも無責任な放言でないことは、士気の鼓吹に付いては近年の佐賀の郷党の例もあるし、スキーに至っては軍隊の教練を学校の体操に取り入れている。また、娯楽・趣味として活用しようという話しも聞いている。

天に達する〈バベル〉の塔を築くようなことだと言われても、自分がその「ポッシビリテ（Possibility）」を信ずる限りは、手段・方法の的確性を証明してからでないと提案できないと言うことはない。まして、世の中の発明家は、他人の思いつきによって、その方法を考え出している例も多いではないか。

## 七

事業の「盛衰消長」は、人為的な原因よりも天然の地勢によることの方が直接的で大きい。それは前述のような人情風俗が風土に影響されるよりも大きい。

従来、上越は商業地としては天恵の地ではない。つまり沿岸には良港がなく、特産物としての資源も特にない。この二点が商業繁栄地にならない大きな原因であることは、多くの識者も指摘しているとおりである。直江津港は波浪荒く、郷津湾は未完成品である。加えて近年の直富線（富直線＝北陸本線）の開通によって、船舶に拠る貨物の集散を富山に壟断されていることなどが、ますます右の事を証明している。




大鹿煙草の引き札
「萬号　小日向ナカ製」
「ふるさと新井のあゆみ」より
（提供：妙高小学校）

米産額が五十万石に上下し、麦・葉煙草などが多少異彩を放っているものの、今は全国的に見ればたいしたことはない。しかし今後、上越の一大産品に位置させるよう計るべきであろう。

近年、郡村農会の発達、農学校、農産物共進会などの農事に関する進歩は喜ぶべき現象であり、このようななかで、大鹿（おおじか）（妙高市）煙草増産の要請も聞こえてくる。

以上の状況を見れば、農業の発達改善を怠らないようにすることは、上越の実業発展の一つの策であることは疑う余地がない。

## 八

工業についても見るべきものはない。これは長岡と同様に工業資源がないことによる。しかし将来、上越が実業界に進出しようとするならば、まず工業をあげなければならない。これは私の知人・先輩も一致して言うところである。上越には工場の設置に適した頸城平野があり、長期の積雪期の副業として労働力を得ることができ、また賃金が低廉である。

資源を他に仰ぐことがあっても、土地と賃金面で、いわゆる特産品には及ばないものの相当の発展を見ることは難しいことではない。

バテン・ブレード加工業はすでに有名であるが、藁を原料にしたボール紙、あるいは紡績業を起こすのも有望

である。近年、西頸城で石灰山が発見されているので石炭坑も望みのないことであろう。よく調べあげてみれば、工業を興すに足るものが点々とあるではないか。

雪の利用、農業の進展は上越に資するところはあるが、しかし将来にわたって大きな資源となり得ない。従って、右のような見地から工業の促進こそ、上越の実業界発展の最大の急務であると考える。

## 九

工業を起こすについて、資金の不足という大きな障害がある。

これに関して、上越の世論とも言うべきものに、高田市および上越の地が大地主の地であり、この地の資産家は蓄財のみを念頭に置き、地所を買いこみ一身の地固めをすることに汲々として事業意欲が薄い。信州、大阪、名古屋人のように、利を得ようとするならば、まず与えようとする意識が上越には欠けている。高田電気（上越電気）、西頸城の石灰山事業の大資本は、この地方の人ではないことを見てもわかることである。しかし、これを全て大地主の責任とばかりとは言えない。つまり、資産家が資金を放出する場所がないのである。先に述べたように、上越は実業の地として発展したことがなく、起業意欲が薄い上越そのものの責任である。

雪に埋まり縮こまっている土地の人達に、活発になって旧来の鬱積したものを打破しろと言っても、その方策を示してやらなければ、なにも出来ないのと同様に、資産家に投資しろと言っても、投資した事業から利益をあげて示さなければならない。しかし上越にはその実例に乏しく、また公共のため地方のためと絶叫しても、公共のためとして投じた資産が、なんら功を奏しなかったら、誰が好んで財産を放出すだろうか。

それでは、上越が工業を起こすに足る地ではないのか。私はそうではないと思う。

先覚的小資本家が集まって資金の融通をはかるために設立した信用組合、その資金で資本を投下して拡充した事業と、それに拠って得た利益を公示し、その実効性を示せば、招かずして大資本家が集まってくるはずである。

信用金組合の発達は、高田市および上越の実業界の発展の計る唯一の早道であると確信している。

## 十

組合事業の勃興および発達は近来の上越における新しい動きといえる。頸城三郡の信用組合、高田市および頸城三郡信用組合の連合会、頸城三郡各産業組合の設立、将来は上越頸城三郡産業組合連合協議会の開催をも考えられる。今後は一事業を展開していくためにも、団体の力を頼らなければならなくなっていくであろう。これが小をもって大をなす近道といえる。特殊な地場産業を持たない上越には、産業組合の発達がいっそう必要である。

産業の発達はまた商業の発達を促進してくれるので、信用組合は勿論のこと、他の産業組合の発達を怠らないことが上越実業界発展の一策であることをここで付け加えておく。

## 十一

高田市信用組合は、これを組合員各自の契約に一任するのではなく、郡としては容易ならざることではあるが、市としては少なくとも市会で組合の発達を補助する方法を決議すべきであろう。これは違法でないばかりか、組合員各自の結合をいっそう強固にするものである。

よって私は市会の決議を得るべく、信用組合補助法の一案を提出する。

十二

近時の東北の凶作に対して東北振興会が出来ているが、高田市および頸城三郡にも発展会を組織して、知識人の意見だけではなく発展会の会議の下に関係各層、老壮に関わらず、懸賞などの方法をとって広く意見を求めて採用する必要がある。発展会の組織は上越発展策の一策である。

十三

以上述べてきた高田市および頸城三郡の発展策を総合すれば、

1　人心の振興と実業の発達
2　人心の振興はスキー術の応用による心身の鍛錬
3　2項によって士気を鼓吹し、人心を復興する
4　スキー術の発達は、地方経済の振興にも寄与する
5　実業は工業ではなく農業を奨励する
6　工業は地勢と土地事情を見て立地を決めるべきである
7　工業投資資金の不足は信用組合の発達によって補う
8　産業組合に関しては研究を怠らないようにする
9　市会は組合組織を補助する決議をする
9　市長は「発展会」を組織する

十四

ある人は、私の意見はすでに提案され実行されたもの、あるいは平凡な見解に過ぎない。元来、この問題に付いては、多くの先輩諸氏が苦心しているが、これぞと言う名案がない。これは市長が有名知識人の意見ばかり求めているからであるとも言う。

しかし提案されたものは実行され、実行されたものは怠らずにやることが発展策の秘訣である。先輩諸氏に名案が無いと言うのは、諸氏の責任ではなく、従来、上越の地が〈名案を生む素質に富んでいない〉ことによる。

私の縁者に浴場を営む者が多いが、まちなかに位置する者は、労せずして利益をあげるが、まち外れの者は設備を充実し、お客の待遇をおろそかにしないよう気を配り、燃料を節約し家計を倹約しているので、家業を継続していくことも難しいことではない。これは分相応にして、零細な利益を大切にするということである。上越に、甲州におけるラジュウム鉱脈が発見されたような、破天荒とも言える富の源泉が発見されない限りは、上越の発展策は、右のような〈分相応な生き方〉以外に無い。

先輩諸氏の提言・意見が悪いのではなく、それを実行しないから名案ではないのである。

■バテンレース　明治三一年、飯島保太郎が横浜から指導者を招いて、職人町に工場を開設。頸城一円の副業になった。四三年時点で、高田だけで八千人、生産額三万三千円になった。バテンレースの材料であるブレードも高田で生産されるようになり、一躍、高田の特産品となった。

■青年会　明治三〇年代以降、盛んに結成され、各青年会の連絡機関誌「春日の霞」も創刊された。中頸城郡内で一三七団体があった。

■信用組合・産業組合　大正初年は、和田憲太郎を中心とする有限責任力行信用組合（高田信用金庫の前身）の設立、産業組合中央会高田支部の設立案（新潟支部長富永孝太郎・三和の人）から高田商工会の設立へと、高田における産業振興の動きが活発なっていた。その大きな要因に、大正二年の十三師団満州出兵で高田の経済が不振に陥ったことにより、軍隊依存の経済不安に抱くようになっていたことがある。

## 竹村良貞（談）

文久元年（一八六一）高田四の辻の高田藩士の家に生まれる。一六歳で、西南戦争の徴募巡査を志願して上京。後に慶應義塾大学を卒業し、帰郷して、明治一六年高田新聞社を創業。高田事件では紙上で当局を批判して投獄される。再び上京して改進党系の通信社「新聞用達社」の主筆となる。明治二五年、鈍翁・増田孝が創業した「時事通信社」（現在とは別）と合併して帝国通信社を設立、初代社長となる。当時の通信社の中では抜きん出た配信能力を持っていた。

有態に言えば―、今日の高田は農村のやや発達した程度であって、市としては未だその資格を備えているとは言えない。したがって市民の気風も農村的であり都市的気風が見られない。農村的気風とは、保守退嬰に安んじ進取の気概が無いことであり、都市的気風とは、常に活動的で進取の気概に富んでいることである。我が高田市が前者であるのは、市となってまだ日が浅いため（明治四四年市制施行）、市民がまだ農村的気風のままでいることの結果である。そのような気風を打破して、都市的気風を醸成しなければならない。この努力が無ければ、高田市の将来は決して楽観を許さない。

高田市の現状は商業上も工業においてもこれと言って成績の上がっている物が無い。銀行もたくさんあるが、健全な基盤の上に立って良好な経営状態を維持しているものは、まことに寂しいかぎりである。会社も唯一の会社以外は、萎んで振るわない状態である。

右のことに加えて、現在の事業にせよ新しく会社を起こそうとするにしても、経営者としての資質を持った人材と資本が欠けている。これらが高田の事業が蠢々（りょうりょう）として―ただ虫が蠢くように不振をかこつ原因である。

それでは、この農村的気風から脱客して殖産興業し、高田市の面目を一新するにはどのようにしたら良いのであろうか。もちろん長い歳月をかけて教育の効果を期待するほか無いが、まず目前の課題としては、家族的工業を大いに奨励すべきである。

高田は一年の約三分の一は雪に埋まっており、その間、成すこともなく「炉辺の閑話に耽る」のが常であるが、この貴重な時間の空費を経済的に利用し、併せて市民の殖産興業の思想を起こさせることが最も緊急の課題ではないだろうか。

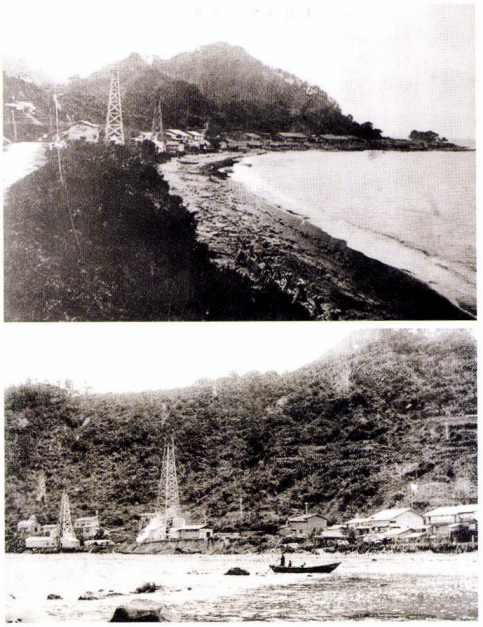
近年、バテンとか麻紡ぎなどの手内職が盛んではあるが、今一歩進めて市当局あるいは情報収集能力のある者が協力して各方面の調査をし、生産過剰を起こさない有利な仕事を奨励し、材料の供給、販路の斡旋などにも協力して欲しい。

手工業以外にも副業的に養蚕を奨励するのも良いであろう。高田が養蚕に不適当な土地柄という理由も無いし、盛んになるに連れて織物業も興るであろう。

要するに、産業を奨励し市民の殖産興業への自覚を促して行けば、市として「形而下の利益をあげるに止まらず、形而上にも大いなる効果を収め」、教育の効果と相まって次第に都市的な気風が醸成され、高田市の発達が実際のものとなるであろう。

右が、今、目前の課題に対処するための一提案である。もし高田市発展の大々的計画を考えるのであれば、「裏日本関門の開放」すなわち郷津湾の築港について声を大にして言わなければならない。この築港こそ高田市発展の唯一の鑰鍵（やくけん）（両字ともカギの意味）と言うべきもので

ある。



郷津湾

■郷津湾築港　郷津湾築港問題は、当時の政争の具にされ混乱を招いた。明治四一年、後に高田市長となる川合直次が、改進党系の「高田新聞」に郷津湾築港についての論説を展開、一方、政友会系の「高田日報」は荒川河口に直江津築港を主張して政争に発展していった。

昭和に入って荒川河口西部築港案、善光寺浜から五智地区への開削による内陸型港湾などが提案されたが、当然実行にいたらなかった。

## 竹内金太郎（談）

竹内家は榊原家に槍で使えた姫路以来の家柄で、禄高は三百石。明治三年生まれ。仙台の第二高等学校（東北大学）から東京帝大法科大学（東大法学部）に進む。仙台時代の友人に土井晩翠がいる。農商務省、新聞記者を経て弁護士。

農商務省時代の明治三九年、「日糖疑獄」事件の責任を取って辞任する大浦農商務省大臣とともに職を辞し、大浦の推薦で東京日々新聞に入社。明治四二年一〇月二六日、旧満州ハルビン駅頭で、朝鮮独立運動家安重根に伊藤博文が暗殺された事件をスクープし、「伊藤薨去」として報じた。

主な弁護　大正八年鈴弁事件。昭和一六年ゾルゲ事件の尾崎秀実（ほつみ）を弁護。昭和二一年東京裁判、この裁判では裁判の不当性を訴えて検事と刺し違えようとして短刀を忍ばせて発覚、弁護人を下りる。昭和一一年阿部定事件では、定の行為を「愛の極地」として弁論、法廷を沸かせたという。丸谷才一著「青い雨傘」〈尾崎秀実と阿部定〉にも紹介されている。

後醍醐天皇の生涯に大変同情し、最晩年まで吉野の後醍醐天皇の陵にぬかずいた。吉野では「変わったじいさん」として知られるようになり、それが縁で中千本に桜の新千本を寄進した。

### 高田の疲弊

藩主・藩士に頼ってきた高田は、廃藩によってその得意先（高田藩）を失ってしまった。その後、公債証書を得て一とき「融通に富める（バブル景気）に乗じて」石油事業、会社、銀行などが勃興して来ると、旧藩士から公債を欺き盗るようにして投資させて士族を貧窮に陥れる結果を招いた。町はその得意先を失って貧窮疲弊しているところへ、明治十九年、信越鉄道線（信越本線）の敷設により利益を直江津に奪われて、ますます窮状に向かうことになった。呉服・太物（綿・麻織物）店の茂田井氏の東京移住もこの影響に他ならない。高田が疲弊の頂点に達したのは明治二五年から三〇年頃までである。

### 養蚕が失敗した理由

幕藩体制の崩壊で職を失った旧藩士は驚いて生産業に奔った。そのひとつが養蚕で、しばらくは盛んであったが頓挫してしまった。その原因は奸商、いわゆる「ボテフリ」が入り込んで、士族の製繭を買い倒し、あるいは量をごまかして損害を与えたため、その生産を断念しなければならなくなった。

### 高田の商人は商売を知らず

商業の秘訣は、その仕事に忠実で綿密な注意を払うことにある。かつて、三越呉服店（三越）の販売員の不親切に憤慨して、帰宅後電話で注意を促しておいたが、翌日、重役が来て謝罪して行った。これを見て三越の成功の原因が分かった。

高田の商人の態度は、主客転倒無愛想もはなはだしく、お客に不愉快な思いをさせてしまうので、二度三度再来するお客はいない。お得意は商家の財産であるにもかかわらず、これをみすみす逃がしてしまうのは間抜けの極みである。高田の商人は世間の商売を知らないで、旧態依然としているために新規に入ってきた商人に負けをとることになる。この見きわめが勝敗の分かれ目である。

日露戦争後、伊予松山に捕虜収容所が設置されると、大阪周辺の商人が入ってきて目抜き通りの一等地を占拠して店を構えた。「その商売振りの花々しさ活気の充満せる実に見事なりき」と目を見張るうちに、捕虜の収容が終わると、さっさと商人は利益を満載して去ってしまった。地元松山の商人には「一物」の利益も無かった。

### 上越人の欠点

上越は比較的豊かで悠長に生活しているため、物を起こすという意識が乏しい。これが活気の無い原因になっているのである。

頸城の耕地は八千町歩に過ぎず、その他はことごとく山林原野、雑木林もしくは草刈場である。人口が少なく肥料に乏しい所は草刈場が必要であるが、上越のような人口の多い所は草肥の必要は無いので、ここを利用して農耕地あるいは林業を起こす必要がある。

クヌギは植えてから十年で相当繁茂してくる。ナラは「ナラの大木」といって価値の無いものの代名詞になっているが、この木は、一尺角・長さ二間の材で八円余りの価格になる。近年、米国へ輸出するようになり極上正目で二百円の高値になっている。

文明が進むにしたがって木材の需要はますます増加しているが、薪炭に替わって石炭・ガスが普及し、ナラの木を燃料用として伐採しなくなる日はまだ先のことであろうから、木材用のナラの造林を考えるべきである。この木は妙高・南葉に多く繁殖しているが、上越人は林業という考えに乏しく、実に嘆かわしいことである。

果実の需要も文明の進歩に伴って食卓に上がることがますます多くなってくる。これも将来有望なものであろう。

土地の有効利用は、群馬、茨城などにはとても及ばない。上越には未開発のために取り残されている「遺利」（取り残している利益）が莫大であるから、これを開発すれば利益を生むことは必然のなり行きであろう。

### 市の実力

高田は、師団の設置で市制を敷いたが、実力を顧みれば心細い限りである。私は市制尚早論者であるが、実力を伴わない体裁のみの市制は危険なことである。市民の生活の実力を養うのが急務である。

### 救済策

高田市の発展の機運を作るには、まず市民の精神的な

啓発をしなければならない。市民を外の空気に触れさせて、世情を知らせなければならない。それには、在住の先輩、郷土出身の成功者、あるいは近くを通過する中央の名士がいれば止まってもらい講演会を開催するなど、あらゆる機会を通して市民に広く外の社会に触れる機会を作らなければならない。これは市当局者に切に望むものである。

次に物質的には副業を起こすべきである。利益が一部の者に集まるような事業ではなく、普及的工業―つまり多くの人が携われる工業が良い。バテン工業などは最適なものである。家庭にいて主婦から子どもまで昼夜を問わず出来る手工業である。私は、このバテンを青森の弘前に紹介したところ、今や同地方で大流行の兆しがあると聞いている。

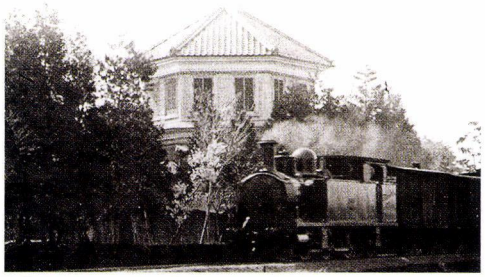
雪を利用した晒のような製品を発明できないだろうか。宇都宮周辺では薬品で晒しているが、天の恵みである雪を利用できないものであろうか。民家の裏の空き地に麻を植えたらどうだろうか。

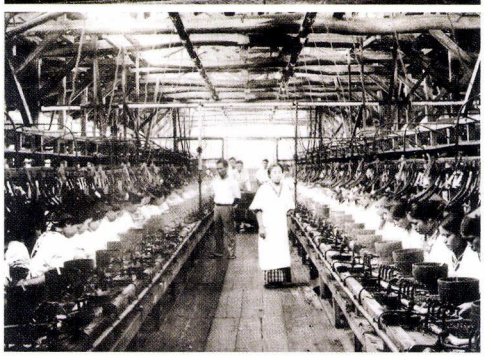
およそ、大げさにやろうとすると失敗するものである。小さな事業でもおろそかにしないでやるところに利益が潜在しているのである。

宇都宮周辺の麻工業を視察して、これを試みるのもいいであろう。その他、提灯、扇子、麻縄（マニラ麻・真田紐）等の手工業も良い。

要約すれば、原料を仲買人が供給し、加工した製品を同じ仲買人が賃金と引き換えに集荷していく、このような広く家庭で携われる手工業であることが必要である。これならば安心であり、家庭で副業を楽しみとし、争ってやるようになるであろう。

最後に一言付け加えておく。「上越が百事政党に毒せらるる傾」があるのは慨嘆すべきことである。





上 開通間もない信越線
後方の洋館は高田別院大門通の踏切付近にあった高陽館か
下 高田製糸

■写真
新潟県写真発展号　大正四年
現代越佐大観　昭和八年
北越出版蒐集絵葉書
■参考資料
訂正越後頸城郡誌稿
大正三年版　高田市史
昭和三三年版　高田市史
新潟県人物百年史
上越市史　通史編5

# 頸城平野に稲作が伝わったころ

小島幸雄

筆者は昨年一一月に大潟地区公民館のお誘いで講座の一こまを担当させていただき、「遺跡が語る地域史」と題してお話しさせていただいた。内容は以下のようである。

一、大潟区の北は海、海岸線には砂丘が広がる、砂丘の南は後背湿地で多様な自然景観が広がる。

二、大潟区周辺は弥生時代中期の珍しい遺物が出土した土地で、高田（頸城）平野に最初に稲作が伝わった地域の一つと推測できる。

三、和田地区から妙高市の北部にも同じ時代の遺跡が分布していて、平野の南と北で初期稲作を知ることができるのではないか。

この講座では、丸山古墳周辺の地形と和田地区の稲荷周辺の弥生時代中期を比較する中から、稲作の伝播に地形が大きく影響することを説いた。和田地区の稲作の原点の一つは青田川の恵みであり、そのことを雄弁に物語るのは稲荷の吹上遺跡から出土したヒスイなどの玉類と弥生時代の特徴的な出土品である。そして、吹上に住んでたくさんの玉を作れた背景には、青田川によって形成された扇状地における稲作があった。もう一つは妙高市の上百々（かみどうどう）から和田寺町周辺で、関川と矢代川にはさまれて渋江川によって形成された土地を安定した生活の場とし、北の崖下に広がる低湿地を稲作の適地として選んだと推測した。では大潟地区はどうかと考えた時、筆者の脳裏に浮かんだのは砂丘の後背湿地を利用することだった。お話しに行くときは、事前に現地を見て思考するこ



吹上遺跡出土の特徴的な出土品
（弥生時代中期）


上百々の崖の上と下


大潟区周辺の航空写真
手前が鵜池で矢印が丸山古墳（大潟町史）



上 クリス形石剣（頸城文化）
左 石剣（大潟町史）

とは以前にも書いた。今回も何度も鵜ノ池を中心とした景観を見て回った。長崎地区の古砂丘の露頭や丸山古墳周辺の湿地を実際に見て、古砂丘から湧き出る水がこの地区の初期稲作の重要な水源になったのであろうと推測した。すでに記したように弥生時代中期と考えられている珍しい遺物も両地区で出土していることからもそれを裏付けるものであった。

写真は大潟区から出土したものでクリス形石剣と称されているもので、大陸から伝わった青銅製武器の銅戈（どうか）を模して石で作ったので石戈（せきか）と呼ぶのが一般的だ。故森成麟造氏の蒐集品である。弥生時代中期頃のものとされ、国の重要美術品に認定されているとても美麗な石器である。大潟区にはこのほか弥生時代中期と考えられる石剣も出土していて、弥生時代中期の稲作先進地として認識される。出土地は鵜ノ池周辺に集中し、丸山古墳と呼ばれる遺構もあって古くから注目された土地で、明治時代すでに在京の考古学者が調査に訪れたり、昭和六二年には新潟大学が発掘調査を行っている。

弥生時代は稲作が始まった時代とされ、私たちは歴史の教科書で昭和一〇年代に始まった静岡市の登呂遺跡の発掘調査で見つかった竪穴住居と水田跡の写真を見てきた。筆者の記憶にも、竪穴住居と一緒に写る水田の姿が鮮明に残っている。しかし、この地域に住んで高田平野のように湿気が多く多雪地の沖積地で水田と同じ面で竪穴の生活ができるのだろうかとも考えるようになった。ある時、和田地区の皆さんと地域の歴史を考えた際に気付いたのが、乾いた土地に住みながら水利をどうしたら稲作が容易かという問いだった。

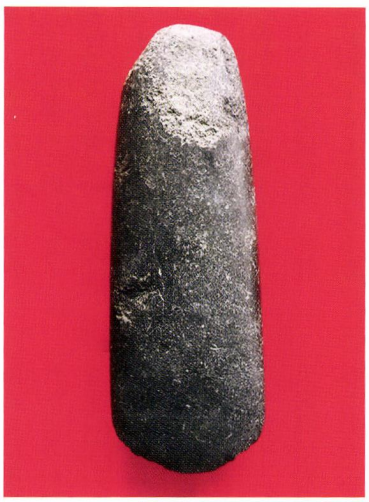
結果はこうである。和田地区は稲作が容易な粘性土で形成された土地と、妙高山由来の保水性には劣るが乾燥して住みやすい土地の異なるタイプの土壌があることに気づかされた。そこから弥生人たちが生活しやすくて稲作に容易な土地を見出そうとしたところ、前述のように青田川の形成した扇状地の先端にある稲荷周辺と、渋江川によって運ばれたと推測される妙高山の細かな火砕流で形成された地下水脈から浸み出す湧水を利用した稲作を想定したのだ。前者は吹上遺跡であり、後者は上百々遺跡などである。上百々遺跡の周辺には他にも弥生時代中期の遺物を出土する遺跡があり、これらの遺跡はいずれも北側に二mを超える明らかに段差のある土地に営まれていることが分かった。その段差は河川と並行ではなく直交して形成されていることから、弥生時代中期に稲作を伝えた人たちが最初に選んだ生活の場であることに気づかされたのだった。二mの段差に下に広がる現代の集落が形成されている田園地帯こそ、弥生人たちのコメ生産を支えた土地であったのだろう。

大潟区に目を転じると、和田地区のような明確な段差ではないが、後背湿地の汀線付近にある段差が目に入ってくる。ここには先に書いた遺物から、弥生時代中期の遺跡が存在したことは明白である。では和田地区のような稲作適地があったかどうか考えてみたい。丸山古墳にほど近い鵜ノ池の周囲を歩いていた時に確認できたのは、岸ぎりぎりまで水がきているのではなく、岸から少し離れた地点に汀線が見られたことだった。この岸と汀線との空間こそ丸山古墳周辺に進出を果たした弥生人たちが稲作を行っていた場所と考えるようになった。これを潟町砂丘の後背湿地全体に広げて考えると、大潟周辺の丘陵から大潟に接する干潟は多くの場所で稲作が行われたことが推測できる。

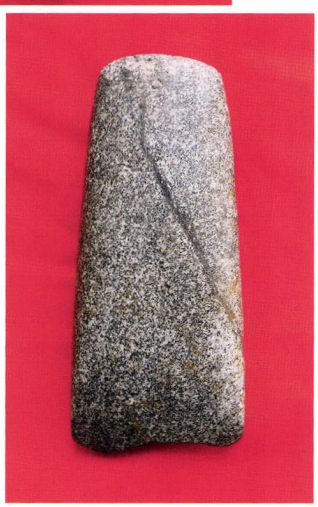
このような視点で地域を考えると、弥生人が高田平野で繰り広げた稲作の実態が見えてくるのではないかと考えるに



御幸ヶ丘出土土器
（弥生時代後期）



太型蛤刀石斧
（土器と同じ整理箱に入っていた）



太型蛤刀石斧
（参考　吹上遺跡出土・弥生時代中期）

至った。

### ◆御幸ヶ丘の出土品と一緒に保管されていた石斧

昭和五四年の冬、今のなおえつ保育園の場所にあった社会教育館で出土遺物の整理したことがあった。五二・五三年度の出土品が膨大で、整理のための場所が不足し車庫を借りて作業したのだった。上越市には現在埋蔵文化財センターがあり、合併前の各区の出土品の一部を含め出土はそこに収蔵されている。社会教育館で土器の復元作業を行っていた時、「御幸ヶ丘」と手書きされた菓子箱の中に弥生時代の土器が数点入っていたのを見せていただいた。

四〇年余を経た今も鮮明に記憶が残っていて、本稿を書く前に記憶を確かめるために土器を見せていただいた。箱は失われていたが記憶どおり後期のものであった。ところが同じ整理箱に入っていた石器を見て驚いた。なんと太型蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきふ）という極めて特徴的石器だった。

長さ二二、七cm重さ一三六六gを測り、とても美麗で欠損部も少ない。太型蛤刃石斧は稲作とともに中国大陸や朝鮮半島から伝えられた道具といわれ、弥生時代前期から中期のものとされる。わが国の稲作の起源を知るとされる石器が御幸が丘の整理箱に入っていたのには驚くほかはなかった。

この土器は弥生時代後期に属するもので、写真に示した石器とは時代が少しずれている。もう一点、石斧には出土地が記されていないことと、土器と一緒の菓子箱に入っていたとする自信は無いのだ。現段階では、石器が弥生時代に属する太型蛤刃石斧であるという事実と御幸が丘出土という土器と一緒に保管されていたということから類推することが限界ということになるが、それを承知でこの石斧が語ってくれることを考えてみた。

### ◆太型蛤刃石斧から見えてくるもの

この特徴的な石斧は稲作と関係の深いもので、市内で出土したことが知られているのは吹上遺跡と釜蓋遺跡、それに裏山遺跡と記憶している。弥生時代中期から後期の遺跡である。御幸ヶ丘からは縄文時代の遺物も採集されていて、上越市史では善光寺浜遺跡と一緒に考えるべきではないかと指摘している。縄文時代に既に人が住み着いていたことを考えると、弥生時代の人たちが住んでいて何ら不思議はない。ここで課題があるとすれば弥生時代の人たちが稲作を行える環境が整っていたかということである。

正善寺川が直江津に流れていたと、かねがね説いてきたが、だとすれば流路が後背湿地かその南になるはずで、後背湿地は水に不足することはない。また、縄文時代から人の活動が土地に刻まれていたことが明白であるから、弥生時代にも生

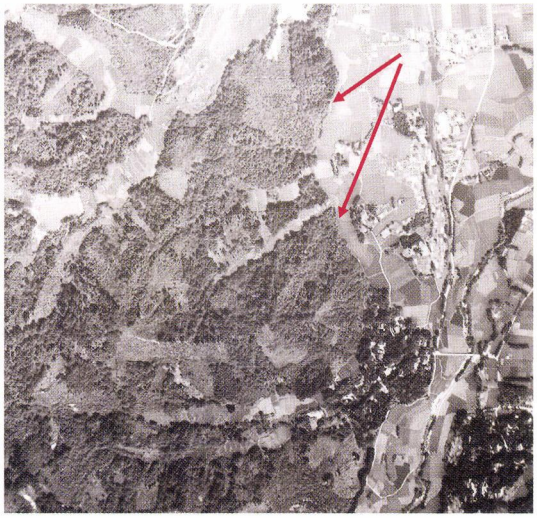
活適地という面では変わりない。加えて正善寺川が多量の水と栄養分を運んでくれば、稲作適地であったとすることも可能である。前述のように、御幸が丘出土と伝えられるのは弥生時代後期だけでなく縄文時代の遺物もあるとすれば、縄文時代と弥生時代後期の間の中期が無いというのも不自然で、縄文時代から五〇〇〇年もの間、人が住み続けたということになりはしないだろうか。この石斧が御幸が丘出土である確証が得られたなら、弥生時代中期に直江津西本町の北側あたりに水田が広がり、貫頭衣という弥生時代の衣装を着た人たちが田んぼで稲を刈っていたことを想起できるのだが。

推論に推論を重ねてしまっていることは重々承知で、太型蛤刃石斧という特徴的な石器に、直江津地域の歴史が空白だった一時期を埋める「語り部」となってほしいという願いからあえて紹介を試みたものである。どなたか社会教育館に所蔵された経緯を教えていただけたらと切に願っている。

### ◆正善寺川の利水と直江津の開発

航空写真は筆者が教育委員会に在職中、道路公団（当時）から頂いた航空写真の一部である。二枚の写真と北陸自動車道の発掘調査結果によって、直江津方面に流れていた正善寺川の流路変更が行われたという想定が確定的になった。筆者は正善寺川の流路が変更されたことで、直江津の砂丘以外に生活の場として利用される面積が広がったことを説いてきたが、その時期については春日山城の総構の南の端が自然地形（川跡）に制約されているので、少なくとも「御館の乱」以降ではないことが推測できるものの明確ではない。直江津の後背湿地で最も古い土地利用が確認されたのは、直江津駅南側で行われた区画整理の際実施された至徳寺跡（現在は守護所と推測）地点の発掘調査で出土した遺物群で、一一～一三世紀の時代が考えられている。その広がりは駅南に限られ、五智方面に広がってはいない（A区画）。この広がりの限界を考えると、一一～一三世紀の直江津の沖積地への進出は明らかに水運を意識したもので、土地利用の根拠は正善寺川でもたらされた土砂が堆積して形成された自然堤防の利用ということになる。したがって、五智方面に広がることはなかったということもうなづける。

読者は関川の河口が大きく蛇行していることは既にご存じであろう。水害で水に浮いたようになった労災病院の写真を記憶していたり、実際に目にされた方もいらっしゃるのでは



旧正善寺川の河道の痕が確認できる（矢印）



宅地が進み古い地形が確認できない
（平成 10 年）



守護所とみられる「館」の堀

なかろうか。あのような姿になったのは、労災病院のある場所が関川によって形成された段丘の下段であったことによるもので、上の段丘や自然堤防上ではなかった。

一一世紀に直江津に進出できたのは大土木工事によって土地造成がなされたのではなく、正善寺川の自然堤防を利用した営みだったということになる。

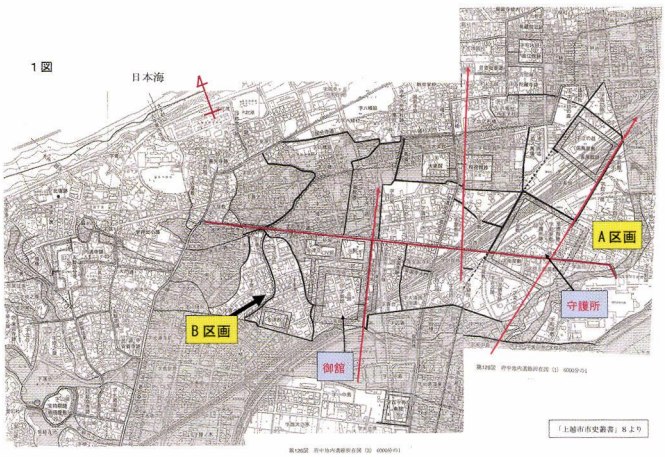
では、一一世紀の直江津の後背湿地への進出が水運を意識したものであったと仮定して、一五世紀に守護所が計画されたとき河川改修は必要だったであろうか。筆者は必ずしも絶対条件とは考えていない。守護所と推定されている大きな館が写真のような堀によって囲まれていたこと自体、水からの防御が想定される。堀の大きさは人物との比較で想像していただきたい。それに一五世紀の遺構も守護所に限られ、B区画からは過去に守護所と同時代の遺跡や遺物が発見されたことのないことがそれを物語っている。守護所が築かれたころやそれ以前の遺物が発見されているのは砂丘から続く丘陵上であり、日本海を望む丘とその周囲である。ただ、安国寺の地名が守護所の西にあるが、時代を特定できる遺物が出土した形跡がなく現段階では判断できないが、御館跡の出土遺物には守護所の時期までさかのぼるものはない。

府中の館群を地形図に落として考察されたのは金子拓男氏で、「上越市史叢書8」に地図が掲載されているので興味のある方は参照されたい。今回も本誌で使用させていただく。図中にこれまで述べてきたことを示すと、A区画とB区画で時代に差があることが理解できる。A区画は古代の終わりころから中世の初め、B区画は御館造営以降と考えたら正善寺川の流路変更は謙信によるものと考えた方がよさそうである。謙信は守護所を使用していないと考えられているので、自然堤防を利用できなかった謙信が御館の造営に際して、直江津の乾燥化を計画し、正善寺川の流路変更を行ったと考えるのが妥当なのであろう。

### ◆直江津が古代以前の景観に戻った

一枚の古絵図を示した。これも「市史叢書8」に掲載されたものである。今回は後背湿地の形成に不可欠な水の補給路として湧水が描かれていることに注目してみたい。

直江津、いわゆる越後府中という都市は一一世から一七世紀初めにかけて五百年もかけ、正善寺川の流路変更という大土木事業を経て形成されてきたものだったが、堀氏の福島築城で景観が一変したと考えられ、それをよく示すのがここに示した府中八幡社の社殿裏の湧水と絵図の下方にえがかれた「田」の文字である。本稿の前段で三か所の稲作先進地を想定し、その一つの候補地に直江津の砂丘後背湿地を挙げた。

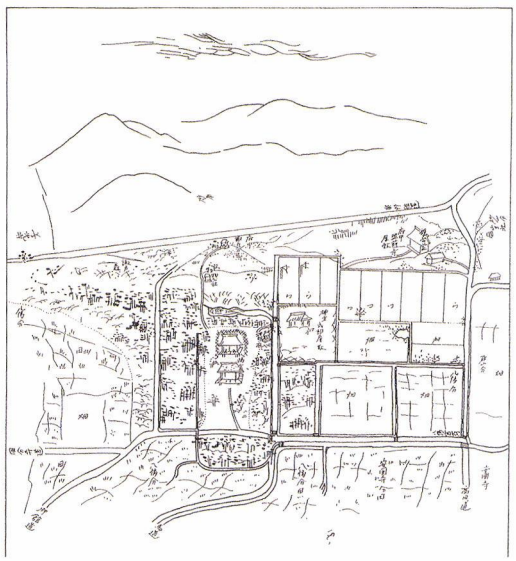



府中の館想定図（市史叢書8）

いずれも地下水が湧き出ていることが指摘できる土地で、湿地を水田化することと湧水を供給する地層を持つ高台に集落を形成することができるという条件が共通していた。ただ、直江津は他の二か所と違い、中世に府中という越後随一の都市に変貌したためその痕跡を示す遺構や遺物が失われていたのであった。

絵図に目を移すと、社殿の奥に池が描かれそこから田に向かって水路が伸びる。社殿の右手には「畑」と示され区画があって方形である。区画が方形であることは土地が平坦であったことを明確に示すもので、すべてが屋敷であったとまでは言わないが少なくとも畑と書かれた部分は現在も住宅地であり、中世的景観を残しているといってよいだろう。住宅地と言えば「田」と表現された部分も現在は住宅地である。しかし、絵図が描かれたときには水田だったことは明らかで、近世には農村ともいえる姿を示していて直江津が府中という都市から変貌する姿が見えてくる。なお、短冊形の土地は塩田や山林に多く、斜面と思える。

現在、直江津は一面都市化して農村であったことを示す姿を見ることはできないが、福島築城からしばらくは水田の広がる田園地帯であったことは容易に推測できる。高田城下町が藩主の交代で家臣団の住宅地が不要になり水田化したように、沖積地に形成された都市であればこそ、水田の形成は湧水と用水路によって可能であった。さらに、都市化は平坦な区画の造成も意味していて、水田化は必然といって過言ではない。「天王川」は、砂丘から供給される湧水を集める都市直江津の土地の乾燥化にとって不可欠の施設ともいえるものだったであろう。近世直江津の田園空間は、弥生時代に求められる土地利用が原点であった可能性が指摘できる。



府中八幡市史絵図（市史叢書８）

## ◆弥生時代から見えてくる直江津

昭和五二年四月に上越市教育委員会に採用されて以来、ずっと高田平野における二〇〇〇年間の人の動きを考えてきた。平野に多くの弥生人の足跡が見られるのは弥生時代の終わりから古墳時代の初めであって、自然堤防に多くの遺跡が知られている。ところがこの平野進出は長くは続かず、短期間で人間行動が見られなくなる。しかし、弥生時代中期に進出した吹上遺跡は絶えることなく五〇〇年も続いている。このことは弥生時代中期に進出を果たした弥生時代中期の人たちはよほど条件に恵まれた空間を選んだことになり、大げさに言えば現代に続く稲作適地を選択したといえるのだ。

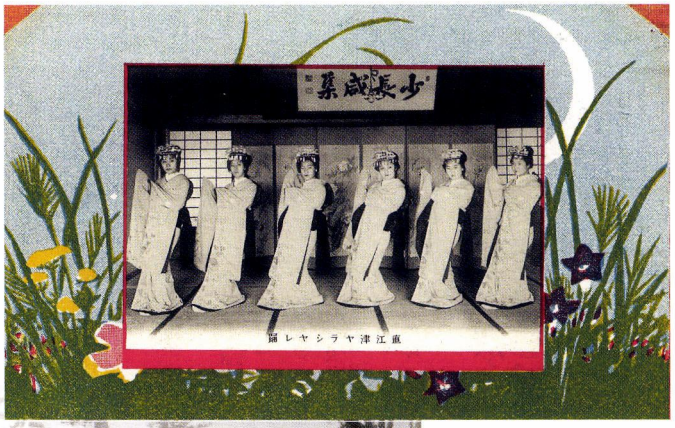
直江津に弥生時代中期の人たちが進出した確率はどうだろうか、太型蛤刃石斧だけでそれを実証できるとも思えないが、今回の調査で得られた資料の精度を高めて、これからも中世越後府中の成り立ちとその前後の町を考えていくつもりである。稲作適地は人間が作り出せるものではない。適地は長い年月を経て自然界で形成されていくものであるため、その後の人間活動も制約を受けているはずだ。それを見出せば二〇〇〇年前の直江津が見えてくるのかもしれない。二〇〇〇年前の人たちも見た夕日を現代の私たちも見ている。海に沈む夕日を見ると、ここに錨を下ろした人たち、ここから旅立った人たちに思いを馳せてしまのは私だけではあるまい。

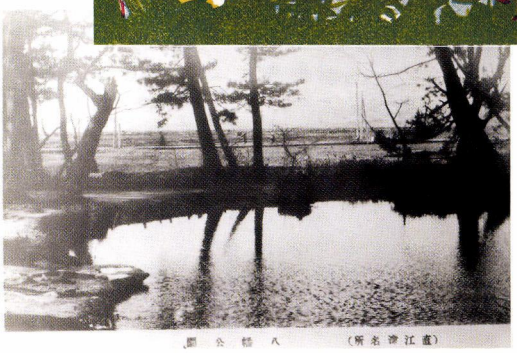
（上越市学芸員）

## 歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

# 直江津 ヤラシャレ踊



ヤラシャレ踊の絵はがきと三宜楼から見た南に広がる田園

江戸時代の直江津今町遊郭時代から続く「ヤラシャレ踊」の絵はがき。

明治三二年、尾崎紅葉は「煙霞療養」の旅の帰りの列車から、吟風川合直治に―わりなくひきおろされ―府中八幡の裏手にあった料亭三宜楼に一泊し、

涼めとやななつ踊の袖のかぜ

と詠んでいる。「ななつ踊」とは、紅葉が「ヤラシャレ」では品がないので、「ななつ踊」としたらどうかという提案した時の句である。

直江津でのことは、読売新聞の連載「煙霞療養」には載っていないが、「新潟新聞」に「佐渡土産」として寄稿している。

明治四二年六月、河東碧梧桐は「続三千里」の旅で新潟県を訪れ、三〇日に先の川合吟風らに招かれて料理旅館「いかごん」で「ヤラシャレ踊」を見ている。

―夜、直江津に帰って本場のヤラシャレ踊を見た。昔は七、八つから十二位の少女が揃いの衣装に揃いの花簪をさして、太鼓笛三味線の囃子で踊ったものであったがと、囃子も踊り手も少なくなり、ようやく維持しているという話を聞き、保存会の発足を提案したところ、名誉賛助員に命ぜられて、辞すこともできず、

撫子も港景色に彩らん

という一句を残した。

遡ること天保一（一八三〇）年、高田城下や直江津今町に逗留し、富本節の興行をした富本繁大夫も今町遊郭で見物し「流行唄 ヤラシャレヤラシャレと囃子禿大勢にて踊る」と、旅日記「筆満可勢」に書いている。

今は失われてしまい、当然、音源も譜面もない。どんな曲だったのか。

## 発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

## あとがき

今年は高田・直江津が合併し、上越市が発足して五〇年の節目を迎えました。

その合併から遡ること五〇年も前に「上越発展策」を提言されていたことは驚きであり、またその内容も現代の上越市の状況と照らし合わせてみると非常に興味深いと思います。

コロナ禍の中、世の中全体が元気を失っていますが、いずれ訪れる収束の後に上越市の振興・発展に向けた「ヒント」が数多く含まれていると感じざるを得ません。

（事務局）

目次


トキ鉄直江津D51レールパークを歩く　4
特集　高田・直江津合併　上越市発足五〇年
一〇〇年前に
「上越発展策」を提言した人たち　8
頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ ⑤
頸城平野に稲作が伝わったころ
上越市学芸員　小島幸雄　24
歴史は「今日」への手紙　直江津ヤラシャレ踊　30
巻頭エッセイ・私の直江津
直江津　今は昔の三題噺　堺寛彦　2



「直江の津」
第一八巻二号　通巻四八号
発行日／令和三年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話 ㈹〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―一一―一
制作協力・北越出版

2021・2号

# 直江の津

発行／令和三年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン

頒布価格／五五〇円（税込）